

紀長谷雄 ―節操の文人―

井上辰雄

序

九世紀の半ばから、十世紀の始めにかけて、菅原道真から詩才を愛され、最も信頼された文人官僚がいた。名を、紀長谷雄きのはせおという。彼は、豊かな文藻を誇る異才の詩人であったが、一方、極めて信義にも厚い人物でもあった。

いうまでもなく、長谷雄の生きた時代は、当時の権力者左大臣藤原時ととき平ひらが、ライバルの右大臣菅原道真すがらみさざねを大宰府に追いやる政治的悲劇が起り、廟堂に立つ官僚ひとりひとりが、自らの立場を試される困難な時代を迎えていた。

そのなかにあつて、不遇な道具の立場を、終生、精神的に支持し、擁護しつづけたのが、長谷雄であった。それ故に、道真から、最後まで心の友として信頼されていたのである。時には、道真を目の敵とした三善清行きよゆきからは、「無才の博士はかせ」(『今昔物語』本朝世俗上)と痛罵されている。だが、長谷雄は平然と耐え、自らの信ずる道を曲げることはなかった。この事は、長谷雄の忍耐力や度量の大きさを示す一つのエピソードをなすものであろう。

更にまた、彼の洒脱の精神は、漢詩のみならず、戯曲的な片鱗をうか

がわせる作品をいくつか、残している。恐らくそれは、現世の醜い政争から、ひとときの離脱であり、癒し遊びのなせるわざであったのである。この高踏的な趣向こそ、長谷雄の精神的自由を一生支えつづけてきたといつてよいと考えている。

だが、長谷雄の生きた時代においては、紀氏出身者は、清和天皇の擁立という政争以来、藤原氏一族からうとまれ、政治的な活躍はいちぢるしく、はばまれていた時期でもあった。そのなかにあつても、ひとり、長谷雄は、宇多上皇などの有識者の庇護を受け、当時、不遇な紀氏としては、最高の中納言にまで昇任している。恐らく、権勢者の藤原氏といえ、長谷雄の才能と人柄を、無視し得なかったからであろう。かくして、彼は、醍醐天皇の所謂「延喜の治」の典型的な官人として政治や文化の一翼を荷いつづけていたのである。

このように、節操ある高潔な文人官僚としての長谷雄は、当然ながら後世のひとびとも敬慕されつづけていくが、わたくしは、いま長谷雄の略伝と、多才な詩藻を少しくまじえて、平安初期の時代を、見事に生き抜いた典型的な人物を、描いていきたいと、思っている。

本論

紀長谷雄は『公卿補任』には、参議右大弁飯麿の六世の孫で、弾正忠の貞範の男とされている。これによれば、長谷雄は、仁明天皇の承和十二年（八四五）二月に、誕生したという。

『紀氏系図』（『続群書類従』所収）には、父国守は、侍医、内薬正、典薬頭などを歴任し、特に医道を家業として伝えて来たが、国守の遺誠で、紀氏の衰退から脱却するために、新しく紀家を継ぐ者には紀伝道を学ばせることになったという。なぜなら医道の最高位である典薬頭でも、従五位下相当官に過ぎないからである。

しかし、その遺誠を果せぬことを覚った貞範は、自ら長谷寺に参籠し、文才の優れた子を授けることを願ったと伝えている。満願の日に至り、御帳の中より十二、三才ばかりの童子が現れ、貞範の懇篤なる願いをききとどけ、吾は「汝の子とならん」と伝げたと記されている。また、その時貞範に向って、その童子は、汝とこの山の松に、変らぬ契りを結ぶばんと夢告したという。

やがて、貞範は夢告にいう「松」は、「十八公」とも書くこと気付いた。観音の縁日は、十八日であるので、恐らく、観世音菩薩が、伽藍守護の金剛童子を授けて下さったと歎喜し、生れて来た子を長谷観音に因み、「長谷雄」と名付けという。（『三国伝記』十一、中納言長谷雄卿事）

奈良県桜井市初瀬にある長谷寺は、創建伝承はいろいろと伝えられるが、一般には奈良朝の初めの頃、僧道明が沙弥徳道などを率いて十一面観音をまつたことに由来するという。日本における十一面観音の信仰は、奈良朝前後より盛んとなり、この観音に念ずれば、容姿端麗の男児、な

いしは上品優雅な女兒を授るといわれた。又、金剛童子は、金剛杵を持つ童子で、諸障を除き、生を司る童子と考えられていた。

このように、貞範が長谷寺に参籠したのは、家運の隆昌を荷う子を授けてもらうことにあったから、当然ながら長谷雄は生れながらに、紀氏の家運復興という重荷をせおわされることとなっていた。いわば、長谷雄は紀氏の期待の子として出生したのである。

だが、長谷寺の十一面観音に祈って授った子といわれる長谷雄の前途は、決して、始めから安穩なものではなかった。長谷雄の父、貞範は弾正忠という下級官僚に過ぎなかつたからである。弾正大忠は正六位上の相当官である。（『令義解』官位令）弾正台は、風俗を清肅し、内外の非違を弹奏する職務とする役所で、長官の尹、次官の弼の下に位置する官が大忠、少忠である。（『職員令』）当時、三位以上を「貴」、五位以上を「通貴」とする時代には、五位と六位の差異断絶は、極めて大きかったのである。通例、六位以下の家の者が、五位以上に昇ることは、非常に稀有であったということが実であった。

それに加えて、この当時の紀氏一族の置れた政治的環境は困難な時期を迎え、きわめて厳しいものがあつた。清和天皇即位をめぐる政争において、紀氏一族は向から藤原氏と対立し、紀氏一門は、あえなく負れ去り、受難の時期にあつたからである。具体的には、文徳天皇の後継の皇太子の擁立をめぐる争いを指す。結末的には、嘉祥三年（八五〇）に、藤原良房の娘、明子の生む、生後わずか九ヶ月の惟仁親王（後の清和天皇）が、紀名虎の娘、静子が生む惟喬親王らの三兄を超えて皇太子に立てられたのである。この事件を契機に、紀氏一族は不遇の時代を迎えた

のである。『日本紀略』『大鏡』参照)

それ故、生れながらに、紀家の大望を担された長谷雄であったが、その前途は、それこそ紆余曲折の道程をたどらざるを得なかった。長谷雄が自ら草した『延喜以後詩序』と題する長谷雄の自伝が、『本朝文粹』書八序に採されているが、

「予は十有五にして学に志し、十八にて頗る文を属るを知る。時に援助無く、未だ提獎に遇わず」と、その冒頭に述べている。

因みに右の文中に、「十有五にして学に志す」というのは、『論語』為政篇に典拠をもつ措辞に過ぎないが、一応文学通りに解すれば、貞観元年(八五九)より学問に打ち込んだことになる。紀家復興の期待を荷わされていただけに、長谷雄としても、学問の道に於いて、より抜きん出るものでなければならなかった。だが、微官出身者である長谷雄には、有力な援助者も無く、学問を領導してくれる人物に恵まれなかったようである。当時儒学の本流をなす菅原道真は、家君、是善や鴻儒島田忠臣の教導があり、それとならび称される大江氏も、音人、千古、継時、重光、匡衡と家学は継承され、代々、父、父が孫や子を常に訓誡し、勉学の道を教導していたのである。後藤昭雄氏はこのような事実を「提獎」という解していられる。(後藤昭雄『紀長谷雄「延喜以後詩序」私注。『平安朝文人志』所収、一四二頁)

だが、提獎は、「取り立てる。あげすすめる」意であるから、寧ろ他人が、その人物を見込んで取り立ててくれるとことと解すべきではあるまいか。『北斎書』趙彦深伝に

「提二獎人物一、皆、行業為先」

とか、或は『北史』魏收伝にも

「提二獎後輩一、以二名行一為先」

とあるので、他人や後輩に当る人物を推薦し、あげもちいるというのが、本義ではあるろう。(諸橋徹次『大漢和辞典』巻五、三二二頁)

それはさておき、長谷雄は若い頃においては、良き師や自分を認めてくれる先輩に邂逅しなかったのは、事実であつたらう。

長谷雄は学問に精進していたが、その間にあつても、素質のおもむくまま漢詩や文章に手を染めていくようになった。それが、「十八にして頗る文を属つづるを知る」ということであろう。長谷雄の十八歳は、清和天皇の貞観四年(八六二)の頃に当る。

だが、十八歳で、「頗る文を属るを知る」というのも、うがって考えれば「十八」が観音の縁日に結びつくから、先の十有五にて学を志すと同じように、一種の措辞的表現であつたかも知れない。(後藤昭雄『平安文人志』一三八頁)

しかし、多感な時期に、文学意識に目覚めることを考えれば、長谷雄が、二十歳前後に、文藻に関心を寄せたと考えても決して、不自然ではない。それ故、ここでは『詩序』に基いて論を進めていこう。

それにしても、十八歳で詩作を試るというのは、当時にあつて、必ずしも早いとはいえないようである。たとえば『菅家文章』の初めには、「月夜に梅花を見る」という道真の詩を載せるが、「時に年十一」とある。それに較べて、長谷雄が文藻に目覚めたのは遅いといわなければならない。恐らく、当時、学問に志さず人物は、「周易」、「尚書」、「周礼」、

「儀礼」、「礼記」、「毛詩」、「春秋左氏伝」、及び「孝経」、「論語」などの中国の古典を、少くとも、マスターしなければならなかった。『学令』

さしたる師匠もなく、ほとんど独学に近いような態に置れた長谷雄には、文章に遊ぶ余裕も見い出されなかったのである。

その長谷雄も、十八歳という青春時代の盛りに至って、やっと文章を綴る面白さに目覚めたのである。その頃に至って、

「先師都大夫、当時の秀才たり。予、門徒に列なる」

ことになったのであろう。いうまでもなく、「先師、都大夫」は、都良香を指す。因みに、『本朝文粹』の流布本によられた柿村重松博士の『本朝文粹註釈』や、『国史大系本』などには、「先師大夫」とのみ記るされるので、「先師」には大蔵善行などを当てる案も出されたが、『大日本史料』第一編之四に引かれた「延喜以後詩序」では、「先師都大夫」と明記されているので、今日では、都良香と考えてよいといわれている。(後藤昭雄『紀長谷雄「延喜以後詩序」私注』『平安人物志』所収一九七頁) 都良香は、本姓は、桑原公である。良香の叔父にあたる腹赤も、『文華秀麗集』の撰者のひとり、彼の漢詩も、いくつか採される。例えば

「地勢の風半、域を異にすと雖ども

天文 月兔 尚 光を同じうす。

君を思へば一えに雲間の影に似たり

夜々 相い随がいて 遠郷に到る。」

『文筆秀麗集』上、『群書從』第八輯、四七二頁)

とあるように、詩は豊かなものでありながら、極めて平易な詩作をなしている。

腹赤は、兄の貞継と共に、弘仁十三年(八二二)に上奏して、姓を都宿祢に改めている。本姓の桑原公に就いては、『新撰姓氏録』左京皇別下にも、

「桑原公

上毛野同。豊城入命の五世孫

多奇波世の君之後也」

と記るされている。『三代実録』元慶元年(八七七)十二月二十五日辛卯条にも、

「左京人從五位下讚岐介都宿祢御西、文章博士從五位下兼行大内記越前権介都宿祢良香…、賜二朝臣一。其先、御間城入五十瓊殖天皇(崇神天皇)之後」

と見える。因みに、桑原公は、大和国葛上郡桑原郷を本居とする豪族であるという。(佐伯有清『新撰姓氏の研究』考証篇 第二、八〇頁)

良香は、仁寿三年(八五三)に大学寮に入り、貞観十一年(八六九)に对策に入第し、それより少内記、大内記、文章博士に相ついで任ぜられた典型的な文人官僚であり、当時、当時著名な漢詩人と高く評価されていた。

ところで、長谷雄が、都良香の門に入った時期は、「先師都大夫、當時の秀才たり」とあるので、都良香が文章得業生の時代である。当時「秀才」の称号は、文章得業生を指すからである。(桃裕行『上代学制の研究』修訂版、一〇二頁)この頃から学に志す者は、正式の大学寮の外に、高名な学者について私的に学ぶことが多かったようである。

菅原氏は、清公、是善、道真の三代にわたって、「儒門之領袖」(『扶

『桑略記』(元慶四年条)とたたえられ、多くの門第を輩出している。この時期には、単に菅原氏や、大江氏のみならず、碩学の誉れの高い人物の許には、多くの好学の子弟が集まり、少なからぬ私塾が輩出した。

その一つが、文章得業生の都良香の許に集る若手のグループであった。

長谷雄も早くから、詩才をうたわれた都良香を敬慕して、その門に加わったのであろう。『扶桑略記』元慶三年(八七九)二月廿五日乙酉条に、「博く史伝に通じ、才藻艶発にして、声、京師を動す」

と、都良香の才を称讃している。『古事談』には、都良香が騎馬にて、夜、羅生門を過ぎようとした時、

「氣、霽れて、風は新柳の髪を櫛けずり

氷は消えて、浪、旧苔の鬚を洗う」

(氣霽風櫛二新柳髪一

氷消浪洗二旧苔鬚一)

と自らの詩を吟ずると、羅城門の樓上から「阿波礼 あはれ」の声がかかったと伝えられている。時の人は、都良香の詩作の神妙さに、鬼神も感じせしめたと噂し合ったという。

また、『十訓抄』には、都良香が琵琶湖の竹生島に参詣した時、その眺望の美さに思わず

「三千世界、眼前に尽く」

と嘯くと、竹生島の弁才天は、その句を愛でて

「十二因縁、心裏空なり」

と附けたと伝えている。因みに、十二因は、人生の苦悩の根元をなす十二のものを指し、無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、

生、老死をいう。

ところで、長谷雄が都良香に師事したのは、良香が文章得業生(秀才)の時代とすると、長谷雄が十八、九歳の頃から、二十才の前半と考えてよい。何故なら、『古今和歌集目』に依れば、良香は、

「貞観二年四月廿六日補二文章生一、年月日文章得業生一」

とあり、貞観十一年(八六九)対策に及第して、翌年少内記となった。

この時、良香に「風俗に通ぜよ」、「感応を分れ」の二条にわたる対策を課した問題博士は、道真であった(『菅家文章』巻八)残念ながら良香の対策に対する文章は現在、佚して、伝わらない。丁第の合格の判定とされるが、当時の対策の判定は厳しく、合格者の多くが丁第である。三善清行の如きは、道真によって、一度は不第とされている有様であった。それは兎も角、良香は、同十五年(八七三)従五位下に叙せられ、大内記に転じている。

ところで注目されるべきは、良香が長谷雄に影響を与えた点は、詩文の師ということにとどまらなかった事である。都良香が神仙的人物として敬仰された点も注目されるべきであろう。『本朝神仙伝』などには、仙術を好み、死後百年を経て大峯山の山窟に住したと伝えられている。(『元亨釈書』神仙)(大曾根章介『学者と伝記巷説』(文学、語学、五二号)渋谷栄一『都良香伝』(高知穂論叢)(一)(二)(三)中条順子『都良香伝』(今井源衛教授退官記念。柿村重松『本朝文粹註釈』下、一〇四頁以下)長谷雄も後に神仙や怪奇に異常に興味を示しているのは、一つには、その影響によるのではないだろうか。

長谷雄が、都良香の門第となり、詩作にふけりに、自らの無聊を慰め

ていたが、一つの転機を迎えることになったと記るされている。それは、先の『延喜と後詩序』には

「時に、北堂の諸生、群飲して同じく「幽人、春水に釣す」という詩を賦す。

先師、独り予が詩を擢て曰わく、「綴韻の間、甚だ風骨を得たり」と。此の一言に依りて、漸く声価を増す」

と記るされている事である。ここにいう「北堂」とは、大学寮の文章道の講堂を指す。ここで文章道に学ぶ学生が或る夜群飲して、「幽人春水に釣す」と題した詩を競い合ったという。良香は、ただひとり長谷雄の詩を「綴韻の間、甚だ風骨を得る」と激賞したという。日本人の不得手とした韻を綴る詩作を長谷雄はあやまたず、その上、詩の趣きも優れているというのである。良香のこの一言によつて、無名の長谷雄は一躍、その名を仲間内に知られるようになった。

因みに、残念なのは、長谷雄の「幽人、春水に釣す」という作詩は現在伝わらないので、今日それを手にとつて賞味することは不可能である。

だが、師の推奨が逆に禍いとなり、長谷雄は、その才を妬む同僚から讒されて、師、良香と、次第に疎遠になっていったという。恐らく、わずか二十名という文章生の定員に選ばれるために、学生の間では、熾烈な、嫉妬心や競争心がうづまいていたのであろう。当時の学徒の争いについて、『菅家文集』巻二に「詩を吟ずることを勸めて、紀秀才に寄す」にも

「元慶以来、有識の士、或は公に、或は私に争いて議論を好む。義を立てて堅からざれば痴鈍と謂う。其の外はたゞ酔舞狂歌し、罵辱凌轢する

のみ。」

と当時の風潮をあからさまに諷刺している。(後藤昭雄『紀長谷雄』延喜以後詩序)私注、『平安朝文人志』一四七頁)

長谷雄は、貞観十八年(八七六)に至つて、やつと文章生に補されている。時に、長谷雄は三十二歳に達していた。極めて遅い出世である。

それでも、この門出を記念して字を「紀寛」と称することとなった。この「寛」は長谷雄の処生のモットーであろう。やがて研鑽の功なつて、長谷雄に元慶三年(三七九)得業生に補せられている。『菅家文集』牒に

「文章生。從八位下紀朝臣長谷雄 牒。件人、希顔不_レ休 點須_レ、秀才之選 誠在_二斯人_一、仍充補如件謹解

元慶三年十一月廿日、從五位上行式部少輔兼文章博士菅原朝臣」と見える。「希顔」とは孔子の弟子、顔淵のようになろうとする希望をいい、『晋書』虞溥伝に「希顔之徒、亦顔之倫也」とある。牒は脂の意である。

この文章生或は文章得業生の頃には、長谷雄は、次第に丞相(道真)の人柄に引かれ、「同門の党」を結ぶに至つたという。

或る時、長谷雄が内宴に侍し、「草木共に春に逢う」と題した詩を詠じて献じた時、

「庭増_二気色_一晴沙緑

林変_二容輝_一、宿_二雪紅_一」

(庭は気色を増し、晴沙、緑にして

林は容輝を變じ、雪、紅を宿す)

と詠じた。この詩は、「庭」に対し、「林」をあげ、「気色」は「容輝」に、また、「緑」に対して「紅」と書く綴るように、対句の妙をえた詩作である。平易の語句で綴られながら、極めて美しい詩趣を現わしているといつてよい。又、九月九日（重陽の節）には、「菊は一叢の金に散ず」と題した詩に

「廉士路中 疑不_レ拾
道家煙裏 誤_レ応_レ燒」

（廉士は路中に、疑いて拾わず

道家は煙裏に誤ちて応さに燒くべし）

と作詩したが（『日本紀略』昌泰二年（八九九）九月九日条）、菅丞相（道真）は長谷雄の詩を吟賞し、酔いに乗じて長谷雄の手を執つて、

「元白の再生」

なりと激賞したという。まさに唐の詩人、元稹（元微之）、白居易（白樂天）に擬えて、長谷雄の詩想を誉めたのである。この知遇に感激し、一層長谷雄は道真に近附きを見せるようになった。道真も、長谷雄の廉士や道家の清廉を憧憬する精神と、その詩才と人柄を認めていったようである。

因みに、先の「菊は一叢の金を散ず」の題詠に、三善清行も作詩し、

「酈_り_{けん}の村間は、皆、潤屋にして、陶家の兒子は垂堂せず」

という詩を呈出した。この詩は、始め、

「酈_り_{けん}の村間は、皆富貴にして」

に作つたが、心に褒賞有るべき由を批判されたという。因みに、酈_り_{けん}は河南省南陽府の県で、ここに甘水があつたという。この山上に大菊が

咲き、それを潤した水、つまり菊水を飲むと、皆長寿を得たと伝える。

陶家とは、陶朱公、つまり范蠡の一門で、富豪の家の意である。中国では、古来より「陶朱猗頓之富」といわれ、富貴の家を指す。また「垂堂」は、堂の端が原義だが、転じて危険を冒す意に用いられる。世に「垂堂之戒」（『呉志』陸孫伝）といい、有為の士は危険な場に近寄らぬ誠とされている。『文選』三十九の司馬相如の「上書諫獵」にも「酈_り_{けん}の家累千金坐不_レ垂堂」とある。

しかし、道真は、清行の詩に一顧もあたえず、長谷雄の「廉士、路の中（裏）に拾わず…」の句を推したのである。菊を富貴にたとえるよりも、高雅な廉士の志に比す長谷雄の性格を愛したのである。道真は、三善清行の学識を顕示し、人に少しでもすぐれんとする卑きを嫌い、廉士、道家を高潔さを慕う、長谷雄に心からの共感を示したものである。

因みに、この問題となつた三善清行の詩は、後に『倭漢朗詠集』の菊の部に採用されて清行は面見をほどこすことになつたが、それでも清行のこの詩は、道真の助言によつて「酈_り_{けん}の村間に皆富貴す」を「潤屋」に改めたと伝えられている。『江談抄』第四ノ一一一

長谷雄は、永年の摺伏の時代を経たが、三十六歳に至つて陽成天皇の元慶五年（八八一）にやつと、讃岐権少目に任ぜられている。それでも、権少目は、最下位の少初位相当の位である。

だが、この頃より、次第に長谷雄の才能は認められて行つた。元慶七年（八八三）四月には、右近衛大尉正六位上坂上大宿禰茂樹と共に、従八位上の紀朝臣長谷雄は、掌渤海客使に任ぜられている。因みにこの時にも、道真は、長谷雄と共に鴻臚館において渤海使と詩をかわしている。

道真はそれについて

「主人賓客。呉越舟を同じくして、巧思蕪詞、薰猶敵を共にす。殊に恐らくは、他人の此の勅に預からざる者、これを見て笑い、これを聞きて嘲けらん。磋乎文人相軽んず。証を来哲に待たんののみ」

（鴻臚贈答詩序）（『菅家文集』巻七）

と述べている。この文中にも「文人相い軽んず」とあり、詩作を冷笑する官僚群の少なくなかったことを物語っている。だが同じ年の十二月には、文章得業生従八位上の長谷雄は三階に叙位されている。それは対策という試験に、丁（乙）科を得たためである。（『三代実』元慶七年（八八三）四月二日戊戌条、同年十二月二十七日己未条）

それより先、菅家文章に牒によれば、元慶三年（八七九）十一月に『文章生従八位下紀朝臣長谷雄』が秀才の選に入ったとあるが、『選叙令』には、

「秀才は博学高才の者を取る」

と記るされている。

光孝天皇の仁和二年（八八六）正月に至って、少外記に命ぜられた。従七位上の相当官である。だが、その二年後の仁和四年（八八八）十一月に、やっと従五位下に例している。すでに長谷雄は四十四歳に達している。だが従五位下は、所謂「通貴」である。（『公卿補佐』延喜二年条）恐らく、道真の推挙によるものであろう。

長谷雄も、宇多天皇の時代に入ると、水を得た魚のように、出世を重ねていく。寛平二年（八九〇）正月には、図書頭、翌寛平三年（八九一）三月に、文章博士、同五年（八九二）二日に式部少輔、同六年（八九三）

には、五十歳で従五位上に昇進し、右少弁となる。翌七年（八九五）に正五位下に進み、大学頭に任ぜられている。そして、八年十二月には、従四位下に昇進し、翌年の九年五月に式部大輔兼侍從にあげられている。昌泰年間には、右大弁、左大弁を歴任し、延喜二年（九〇二）正月に参議となつていく。（『公卿補任』延喜二年条）

その略歴から窺えるように、長谷雄は道真が重用されていた宇多天皇の時代に、にわかには昇進し、優秀な文人官僚として認められていく。そして、次々と中央政局の重要な官職に補せられる。

面白いことに、長谷雄を終生のライバルとして、意識していた三善清行も、おかれて同じようなコースを歩んでいる。

清行は、淡路守従五位下の三善氏吉の三男である。仁明天皇の承和十四年（八四七）の生れであるから、長谷雄より二歳下である。貞観十五年（八七三）、二十六歳の時、文章生となり、翌年には、文章得業生となつていく。これは巨勢文雄の推薦である。

この時、巨勢文雄が弟子の三善清行のために推薦文をしたためたが、その一章に

「清行の才名、時輩を超越す」

とあったが、道真は、これを見て「超越」の字をあえて「愚魯」と改めたと伝えている。（『江談抄』）

元慶五年（八八一）、方略試を受けたが、問題博士を務めた菅原道真によって不第とされている。たゞ二年後、改判（丁第）となり、翌年に大学少允に任ぜられている。（『公卿補任』）その後、小内記、大内記を経て、寛平五年（八九三）に備中介として、備中に赴き、四年間ばかり、

民政に当たったという。清行も既に四十六歳という壯年の円熟期を迎えた時期である。

昌泰三年（九〇〇）二月に刑部大輔として、京にもどされ、同年五月に文章博士に補せられて、翌年五十五歳で大学頭を兼ねている。

これを長谷雄の略歴と対比して見れば判るように、ほぼ同じような官職を歴任している。

長谷雄		清行	
寛平二年	図書頭	元慶七年	丁第合格
(八九〇)		(八八三)	
寛平三年	文章博士	元慶八年	大学小允
(八九一)		(八八四)	
寛平五年	式部少輔	仁和二年	小内記
(八九三)		(八八六)	大内記
寛平六年	従五位上右小弁	寛平五年	備中介
(八九四)		(八九五)	
寛平七年	正五位下大学頭	昌泰三年	文章博士
(八九五)		(九〇〇)	
		昌泰四年	大学頭
		(九〇一)	

清行は、終生、菅原道真によって引き立てられた二歳年上の長谷雄にも、激しい敵意を持ちつづけていたと伝えられている。

『江談抄』第三の二七の「善相公（三善清行）と紀納言（紀長谷雄）と口論の事」には、清行と長谷雄が口論した際に、清行は

「無才の博士は和主より始まるなり」

と長谷雄を痛罵したと伝えている。長谷雄はどう思ったのか、それに対

し、やり返さなかったという。そのため長谷雄はそれを承伏したようにいいふらされたが、それでも長谷雄は相手にせず、最後まで黙り通したという。（『今昔物語』本朝世俗部上巻二十四）

これは清行が、長谷雄を貶しめ、自らの学才を誇るための行為であるが、端的にいえば、長谷雄が菅原道真から高い評価されていることに對する清行の熾烈な嫉妬心と見るべきであろう。清行は、自己顕示欲の極めて強い男であったから、長谷雄も、あえてその挑発に乗らなかつたようである。

長谷雄の人柄や政治家としての能力は、宇多天皇も早くから囁目され、宇多上皇が醍醐天皇にあたえられた御遺戒にも

「本院右大臣（藤原時平）、菅家（菅原道真）、定国朝臣（藤原高藤の長男）、秀長朝臣（桓武平氏、高棟王の男）」

とならんで、紀長谷雄を、醍醐天皇に、

「心をしれり、顧問にも、そなわりぬべし」

と推挙されたという。（『古今著聞集』卷 第三 政道忠臣の一）

それを裏付けるように『公卿補任』によれば、醍醐天皇の延喜二年（九〇三）に至って

「右大臣從二位 藤時平

大納言從三位 同定国

參議從四位上 平惟範

參議從四位下 紀長谷雄

が、政局の中樞に並び立っている。因みに、『古今著聞集』にいう平秀長は、平惟範の誤記であろう。惟範も、大納言正三位高棟王の男である。

惟範の母は、贈太政大臣良長の娘の典侍従四位上有子である。『公卿補任』彼は、藏人、皇太后権亮を出発点とし民部大輔、彈正大弼などを経て、大藏卿や太皇太后宮権大夫に任ぜられている。そして民部卿を務め、延喜九年（九〇九）四月に、従三位中納言を極官として薨じている。時に五十五歳と記されている。『公卿補任』惟範は、詩人としても名高く、寛平元年（八八九）の残菊宴や延喜六年（九〇六）の日本紀意宴和歌に歌をとどめている。

ところで、紀長谷雄は、延喜二年（九〇二）に従四位下で参議に列しているが、三善清行は、延喜十七年（九一七）に至って従四位上で参議に任ぜられている。つまり、清行は長谷雄に遅れること約十五年の就任ということになる。長谷雄は、それより先の、延喜十二年（九一二）に六十八歳で中納言従三位で薨じているから、『日本紀略』延喜十二年二月十日己未条）長谷雄の方が、清行より昇進は可成り早いといわなくてはならない。清行は、延喜十八年（九一八）、つまり参議となつた翌年十二月に薨去している。『日本紀略』延喜十八年十二月七日丙午条）年に七十五歳であるが、死ぬ二月前に死んだような状態におちいった時、淨蔵の加持で蘇生したと伝えている。『公卿補任』延喜十八年条）因みに、淨蔵は、清行の八男であり、平将門の調伏のため大威徳法を修するなど、法験着しき僧といわれている。

それは兎も角として、三善清行は道真に好意を寄せず、寧ろ自らの阻害者・反対者と見なしていたようである。その端的な例をあげるとすれば、醍醐天皇の昌泰四年（九〇一）を、辛酉の年であるとして、右大臣菅原道真に辞職を勧告していることである。『日本紀略』昌泰三年十月

十七日辛未条)

それは、凡そ次のような文章であった。

「某（清行）、昔、遊学の次に、儻に術数を習う 明年、辛酉にして、運は変革に当る。」

と述べ、道真が

「身は、翰林より挺して、超えて槐位に昇り、朝の寵榮」

をえたと記し、このように異例の出世をして最終の美を飾り得たのはわずかに吉備真備しかいないから、直ちに勇退すべきだと勸めている。因みに槐位は、最高の三公の位をいう。周代に、三公（大臣）の座位に槐の木を植えたのに因むものである。道真はいうまでもなく、右大臣であった。

『続古事談』巻第一 二九には

「善宰相（三善清行）は、算道を用いて、翌年（延喜元年）、かならず天下に事あるべし。君臣、運のあたるところ、御身にことあるべしとおぼゆ。すべからく、頭名の富をのがれて、つつしみ給へ」

と道真に勧告したと記している。『十訓抄』にも三善清行が、昌泰三年（九〇〇）の十月頃、既に、その危機を予知したと記している。その忠告に、道真は

「離朱の眼といえども睫の上の塵を見ず、仲尼（孔子）の才といえども、箱の中の物を知らず」

と答えて、清行の諫言を退けたという。

因みに、離朱は、目のよく見える人物で、離り婁ろうとも称したという。「慎子」内篇に

「離朱之明 察_二毫末於百歩之外_一」
と見えている。『孟子』離婁上の注に、離婁を

「黃帝時人也。黃帝亡_二其玄珠_レ」、使_二離朱索_一之。離朱者離婁也。能
視_二於百歩之外_一、見_二秋毫之末_一」

と記すように、極めて、物を見つけ出すに秀でた人物とされている。

清行の勸告が、果して善意にもとづくものか、或は道真への嫉妬心、
乃至は競争心に基くものかは、必ずしも詳らかではないが、清行のさか
しらの行為が藤原時平らの策謀に口実を得え、利用されたことは事実で
ある。恐らく、清行が道真と長谷雄グループにかねてから敵対する氣持
が表面化したであろう。清行のような自負心の強い人間は、自己の前
にはだかる人物に、常に強烈な敵愾心を燃しつつづけるものである。

清行に対し、紀長谷雄の終世の処世の法は、

「靡_レ恃_二人之知_一、勿_レ誇_二己之賢_一、須_レ懷_二誠与慎_一以思_二身文全_一」(『朝
野群載』一、辞「書紳辞」)

であった。「人の知を恃むこと靡れ 己の賢を誇る勿れ 須からく 誠
と慎とを懐くべし 以つて身の全を思う」ということは、まさに清行の
生き方と、対照的である。それ故、長谷雄は清行から「無才の博士」と
罵られても、忍耐したのである。

長谷雄は、自らの才をひとに誇ることなく、常に相手に和し、協調し
て行く道を選んでいった。

長谷雄の詩を繙くと、例えば、「風中琴賦」(『本朝文粹』第一)にも

「琴之虚心 待而無厭 風之晦くらます 跡 和而不同」

と詠じている。この「和して同ぜず」は、御存知のように『論語』に子

路の言葉として、「子曰、君子和而不_レ同 小人同而不_レ和」に基くもの
である。

或は、同じく『本朝文粹』に見える紀納言(紀長谷雄)の「山家秋歌」
越詞にも

「一身漂泊厭_二浮名_一。試避喧々毀譽声」(一身漂泊して、浮名を厭い、
試みに避く、喧々たる毀譽の声)
と詠じ、

「休_二世夢_一 断_二塵_一」
と俗塵を断つ山居にあこがれている。

これらの長谷雄の詩句は、端的に、三善清行と異なる道を志向してい
たことを示している。

長谷雄は、道真との交流でも、

「夫れ交りは貴賤なく 新旧無し。志得れば則ち膝漆、一言に生じ、
道合_かうは、則ち風雲 千里に感ず」(『本朝文粹』卷十一「对_二殘菊_一待_二
寒月_一」紀納言)

ということが、モットーとされていた。この文章の「膠漆」は『文選』
鄒陽、獄中上書に

「感_二於心_一、合_二於意_一、堅如_二膠漆_一 昆弟不_レ能_レ離_レ」

に基くもので、膠を漆に投ずれば離すことは困難であることにたとえた
言葉である。これは道真が、かつて長谷雄につげた言葉を想起したもの
いわれるように、道真と長谷雄の交は、「膠漆」の交りであったといっ
てよい。膠は、にかわ、漆はうるしであるが、元の詩にも

「我実膠漆交、中堂共_二杯酒_一」

と見えているし『史記』蔡沢伝にも、

「与^二有道之士^一 為^二膠漆^一」

などに見える如く、堅い心の交りの意味していた。

この結りの契機は、お互に詩作を認めるところにあったのは、注目されてよい。

というのは、当時、儒家に詩無用論をとなえる者が少くなかったからである。島田忠臣の『田氏家集』巻上「春日の仮景に門門を訪う」の一節にも

「儒家は問いて道^いう 詩^し無^む用^{よう}なりと

近来、盛んに詩人無用と道^いう」

と述べているし、長谷雄も『延喜以後詩序』に

「在朝の儒者 寔^{まじ}に繁^{とよ}く徒^{とら}有^あるも 威^みな王^{おう}何^かの輩^{ぐわい}に列^らなりて 潘^{ばん}謝^{しゃ}の

流れを習ず」

と指摘している。因みに「王何」は王弼^{おうひつ}と何晏^{かあん}で、魏の学者である。彼等を代表とする儒者は、専ら、古典の注釈に当った考証の学者である。それに対し「何晏」は潘岳^{ばんがく}と謝靈運^{しゃれいいうん}で、優れた詩人を指す。(藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』二四七頁)

このように文人軽視の風潮のなかに、長谷雄は道真とは、逆に詩を介して、膠漆の交りをしていくのである。政略を超絶した心の交りといつてよい。

たとえば、道真が

「二藍^{ふたあゐ} 一夏^{ひとつゆ}を経^へたり」

と詠ずると、長谷雄は、直ちに

「朽^{くち}葉^は 幾^{いく}廻^{めぐ}りの秋^{あき}ぞ」

と和している。(『江談抄』第六ノ七三)

これは注するまでもなく、「二藍の着物で一夏を過した。朽葉色の着物は、何度目の秋を迎えたか」という意味であるが、朽葉が散らずに幾度も秋を迎えるように、まだまだお盛んですよと畢生、嫉妬心や、あらぬ誹謗にさらされた菅原道真を慰めはげましている詩である。恐らく「朽」は、逆に「久」に転ずることを暗喩したものであろう。

『本朝文粹』巻九に収める元慶六年(八八二)春の「後漢書竟宴^{おのおの} 史を詠じて公ほうこうを得たり」の詩序で、長谷雄は

「菅師匠は業の後を承け 儒林の宗^た為^たり。経籍を心として 王^{おう}何^かを逸^{いつ}契^{けい}に得 風雲思いに入り 張^{ちやう}左^さを神交^{しんかう}に叶う」

と述べている。つまり、菅師匠(道真)は、勿論、菅原家伝来の儒門の大家で、経学の道にかけては大弼^{おほひつ}、何晏に比すべきであるが、文藻に於いても張載、左思の風にもおとらぬといっているのである。因みに、張載は『晋書』の張載伝に

「張載字孟陽、安平人也。：博学有二文章」

とあり、左思に就いては同じく左思伝には

「左思字太冲 齐国臨人也。貌寝口訥。而辞藻莊麗」

とある。(柿村重松『本朝文粹註釈』下二九六頁)

長谷雄と道真の親交が深まるなか、当代の詩匠といわれた島田忠臣からも、長谷雄はその詩が評価されるようになった。『延喜以後詩序』に、島田忠臣が、かつて美作の別駕(国の介)であった時、任期が満ちて帰洛し、長谷雄の詩を見て、驚いたという。なぜなら忠臣ははじめ文章得

業生の長谷雄の詩作を左程認めていなかったからである。それなのに四、五年の間に長足の進歩をとげ、昔と変つて、非常に優れた詩人となつてゐるのを発見したからであるという。

島田忠臣の娘、宣来子は道真の室であり、忠臣は道真の岳父に当る人物であるから、或は道真を介して、長谷雄との交りも進められたのかも知れない。

それにしても、忠臣にしろ、長谷雄にしても、共に儒家の詩人軽視の風潮を慨嘆しているのである。

このように、道真のグループに属して長谷雄は詩文に打ち込んで行くが、次第に民間伝承、特に清貧な奇異なる人物にも異常の関心を寄せた。たとえば

長谷雄には、「白箸の翁」という長詩が残されている。『本朝文粹』六九)

それによれば、清和天皇の貞観の末に、一人の老父がいた。如何なる人であるかも、また、姓名を知られていなかった。

だが常に市中に遊び、白い箸を売つて、業を立てていた。そのため、ひとびとは「白箸の翁」と呼んでいた。彼は、「性を持するに寛仁にして、未だ曾つて、喜怒の色を見ず。放誕にして、慎謹なり」と記している。恐らく、この翁は、長谷雄の描く理想像あこがれの人物といつてよいであらう。

また、長谷雄は、かつて「貧女の吟」という文章を綴つてゐる。『本朝文粹』第一)

昔、富家にひとりの娘がいた。父母から鐘愛され、深窓に大切に育て

られたが、媒介のあまい言葉に欺かれ、長安の一少年に嫁すこととなつた。だが、夫となつた男は「肥馬輕裘」と「鷹犬」にのみ興味を示し、毎日、客と群遊、痛飲を重ね、一日、数千錢を浪費していった。そのため、さしもの資産も尽きる日が来た。その間に父母はなくなり、たのむ兄弟も離散していったが、その躰もやがて嫁を捨てて去つて行つた。残された女性はたゞ「死灰」の如く、自らくやむだけであつたという。これを見た人々は、

「世間の豪貴の女、夫を挾ぶに、意を看て、人を見る莫れ」

と評したという。恐らく、外見上の美貌や世間体にとらわれることなく、その本人の資質や人柄を見るべきという意であろうが、その裏には藤氏一門が権勢のみ執着し、人物や優れた性格を無視することへの痛烈な批判がこめられてゐるのではないだろうか。

また、同じく『本朝文粹』第一の「柳化して松となるの賦」の一節に

「孤節を全うして、移さず、唯、千年の偃蓋を期す」(「全孤節」而不_レ移。唯期_二千年之偃蓋_一)

と記しているが、これも長谷雄の処生のモットーと見てよい。「偃蓋」ともに覆うものの意で

この文章の終には

「応に、嵇康の姿に喩うべし」

と述べてゐる。これは巖上の松をたとえたものであるが『世説』容止、上には

「叔夜之為_レ人、巖々若_二孤松之独立_一」

とある。嵇康は晋の人で、所謂、竹林の七賢人で、官は中散大夫にあり

ながら、弹琴詠詩をして自ら楽しんだ人物とされる。『晋書』の嵇康伝に「身長七尺八寸一美詞氣」といわれた人物である。長谷雄の祕かにあこがれた詩人であろう。

『扶桑集』巻九に収める「後漢書竟宴各詠」久得二公二においても名を逃れて始めて身巢穴を得て

跡を晦して遂に世の垢紛を辞す

と述べている。『後漢書』の龐公は、龐徳公を指すが、彼は、後漢の襄陽の人である。岷山の南に隱棲し、城市に入ることは決して望まなかつた。劉表が、高德を慕つて幾度も迎えを出したが、これに応ずることの無かつたという隱士である。

長谷雄も、これに応ずるかのように

「一身漂泊して淨名を厭い、試みに喧々毀譽の声を避け」

〔山家和歌〕『本朝文粹』第一

と詠じている。

長谷雄の処生のモットーといえ、「慣啄木曲」がある。

一つに鋸刀の剣を買うこと莫く、虚しく篠筵の竿を剪る。我、怨緒を纏うこと有るも、其の怨み断ち難きを知る。

二つに靈方の薬に趁うこと莫く、虚しく金円丸を聴く。我に清貧の病有るも、其の治め難きを知る。

三つに嘗つて、樂酒の來ること莫く、虚しく、一醉の槃みを考う。我に憂沈の因有るも、其の憂い忘れ難きを知る

四つに好みて身を抽じて学ぶこと莫く、虚しく、人の心肝を費す。我、苦辛を抱くこと有るも、其の苦しみの堪え難きを知る

五つに、劍は怨緒を断つ能わず、葉は清貧を補する能わず。酒は沈困を忘る能わず、学に苦辛を補うこと能わず」〔朝野群載〕一、文筆上、曲因みに鋸刀は、切れ味のよい劍である。篠筵は葉は薄き広い竹をいうようである。

『朝野群載』巻一の「落花歎」という詩には

「君は見ずや満る樹を。花顔は咲いて、風に向う、微々落落々、塵中に委す。又、見ずや昨日の少年の子、今朝は、変じて白頭の翁と作るを、榮には悴あり。始めには終り有り、人間、誰か世と与に窮まり無けん」

長谷雄は、虚名や榮華から常に身を引くことに願っていたのかも知れない。

その長谷雄が、最も精神的打撃をこうむった事件がおこった。いうまでもなく長谷雄が師と仰ぐ菅原道真の貶謫である。

その事件は、次のようにして起つたと伝えている。かつて宇多天皇が、醍醐天皇に讓位されることを、道真に相談されたが、道真は、宇多天皇が、貞観九年（八六七）の誕生であり、この頃はまだまだ三十一歳という年であるから、脱の意は早いと諫止したという。だがその事が、道真が娘の衍子を宇多天皇の女御に納れ、もうひとりの娘を、宇多天皇の皇子、齊世親王の妃としていたので、道真は宇多天皇の皇位継続者に女婿の齊世親王を擁立する野心があると疑われたという。勿論、道真の冤罪であつたことは、いうまでもない。

宇多天皇は讓位されるに当り、新帝の醍醐天皇に、遺戒を贈られ、菅原道真を重用することを忠告されている。

それは、凡そ、次のようなのであつたと伝えている。右大臣菅原朝臣

道真は鴻儒であり、深く政事を知るものである。自分も多く諫正されて来た。春宮（後の醍醐天皇）を立てた後に、讓位の意志を、密々に道真に告げたが、道真はこのような大事は、自ら天時あり、忽おろそかにすべからず、早にすべからずと直言を述べて戒めてくれた。…まことに菅原道真は、朕の忠臣である。いや寧ろ新君（醍醐天皇）の功臣といふべき人物である。それ故、其の功を忘れてはならないし、新君は、これを慎重すべきであると述べ、道真を重用すべきことを薦めている。ついでに、

「長谷雄は、博く、經典に渉り、共に大器なり」

と長谷雄の昇進を勧告されているのである。

だが、醍醐天皇が即位されると、時平らの讒言により、道真に、いわかに大宰権師に追いやられることになる。道真は、宇多上皇に

「流れゆく われはみくずに なりぬとも

君しがらみと なりてとどめよ」

と悲痛の心境を歌に託した一首を、宇多上皇に送ったが、宇多上皇は時平らに左衛門陣で阻られ、道真の追放を阻止することができなかったという。

この事件に際し、長谷雄が如何なる態度をとったかは、正史に明らかではない。だが、道真が配所で作った詩集を長谷雄の許に贈っていることから想像すると、少くとも道真が、心より許しあえる人物として、長谷雄を見做していたことだけは、事実であると考えてよからう。因みに道真が長谷雄に託した詩集は『菅家後草』である。

長谷雄も、道真に深い同情の念を寄せ、無念やるかたのない想いをいだきながらも、恐らく宇多上皇に慰留されて、目立った反対運動を起

すようなことをんでいたようである。或は逆効果を恐れていたのかも知れない。それにしても、秘かに、配所の道真を慰め、援助していった。道真もこの長谷雄の誠意に感じ、自らの詩集を与えたのであろう。

醍醐天皇や時平も、その長谷雄の手柄や、政治家としての卓越した資質を無視出来ず、長谷雄が道真に心を寄せることを承知の上で、延喜二年（九〇二）の、早々に、参議に任じている。『公卿補任』時に、長谷雄五十八歳である。それより、左大弁を延喜九年（九〇九）まで務め、延喜十年（九一〇）に従三位権中納言となり、翌年に中納言に進んでいる。

左大弁は、中務、式部、治部、民部の四省を統括する要職であった。左大弁を十年間ばかりつとめたことは長谷雄が、能吏であったことを証するものであろう。『公卿補任』

しかし、長谷雄は単なる事務官僚ではなかった。その詩才は、当时に於ても高く評価され少なからぬ漢詩や、その詩集を残している。

『本朝文集目』上巻第三十一には、紀長谷雄の詩として『春雪賦』など、三十一篇をあげている。

その「春雪賦」は『本朝文集』巻第一に収められているが、その終章に、雪の多いことは「地毛肥え、土膏施す。農畝普く液い、泉脉遠く被る。」とし、かえって豊年の瑞を致すと述べている。このように長谷雄は単なる詩人にとどまらず、能史としての感覚も充分そなえていたのである。なかには、「醍醐天皇、宇多天皇の尊号を停むるを請うる書に答え奉るなども含まれ、長谷雄が宇多上皇の周辺に常に常におり、上皇の深く讓位をめぐる経緯に関り、信頼されていたことを窺うことが出来るので

ある。

『江談抄』五詩事菅原御草事には、道真と長谷雄の詩を比較した文人の評がのせられている。菅原文時は、道真の詩を、あたかも亀甲を削るようなもので、其の上、綵鏤がほどこされ、心力の及ぶ所でないと思賞している。それに較べて、紀家（紀長谷雄）の作詩は、あたかも、捨木を削り、磨瑩を加えたようなものだと思している。勿論、菅原文時の評だけに、道真を神の如く崇る氣持が前面に出され、長谷雄はや、貶められているように見えるが、大江匡房は、長谷雄の詩を、「殊に幽玄の道有り」と述べている。この当時の「幽玄」が如何なる意味を持つか必しもさだかではないが、長谷雄は人生の流転、自然の推移に殊に心を引かれていたことだけは、事実である。例えば、『朝野群載』第一、文筆上の「葉落吟」では

「秋風起り、秋葉飛ぶ。一別の故林、何処にか去る。空中遍満し、樹中稀なり。君見ずや、春榮と秋悴を、自然運くこと、譬へば壯去り、老、帰するところ無きが如し」と無常感を詠じている。

だが、一方において長谷雄は、怪異にも、興味を寄せ「紀家怪異実」なる書を著作したと伝えている。それが為めか、長谷雄を主人公とした『紀中納言絵詞』という絵巻物がつくられている。その中で朱雀門の上で、鬼神と事を行い、死人を寄せ集めた美女を与えられたが、悪鬼につきまとわれ、小野の天神を念じてやつと危きからのがれた話が面白おかしく語られている。

又『今昔物語』第二十四本朝付世俗の「北辺大臣長谷雄中納言語」に

は、長谷雄が月の明るい夜、大学寮の西門より礼成門の橋に立ち、北の方を見ていると、朱雀門の上層に、冠をつけ襖を着た人が垂木の近くに立ち、文を頒してしているを見たという。このように霊人を見頭すことは、希有なることと、ひとびとは語り伝えた」と記している。

長谷雄は、霊異を感得する異常の能力を有していたと見做されていたのであろう。その趣向は、師都香に類似する。長谷雄は当時のひとからも長谷観音から授けられた神霊な人物と考えられていた。

紀長谷雄は、延喜十二年（九一二）二月十日に薨じた。『日本紀略』公卿補任『貞信公記』時に、六十八歳である。『続群書類従』に載せる『紀氏系図』には六十七歳とある。が、『公卿補任』には

「紀長谷雄、六十八三月一日薨、生年承和十二年乙丑、三木（参議）大弁九年、中納言三年」と記されている。因みに、承和十二年は西暦でいえば八四五年であり、

延喜十二年は、九一二年に当る。

『今昔物語』卷三雑事には、長谷雄は大納言に欠員が出来たのを見て、長谷寺に詣いて、大納言昇進を祈ったという。だが、観音の夢の示現に「汝、文章ノ人タルニ依リ、他国ニ可遣キ也」

とあり、夢覚めて帰京した。そして程なく死んだので、世の人は長谷雄は他国に生れたと噂したと伝えている。このことは、『江談抄』一、仏事事にも見えている。

ところで、長谷雄の子弟のことだが、先の『紀氏系図』には、

どと共に、紀長谷雄を十人を挙げている。『朝野群載』一、文章上詩序
まさに、長谷雄は、詩藻豊かな文人であった。

その上、政治家としても稀にみる節操の士であったというべきである。
う。

《参考文献》

所功『菅原道真と紀長谷雄の関係』（古事類苑月報二五）

渡辺秀夫『紀長谷雄について』（『日本文学』二五八）

後藤昭雄『紀長谷雄「延紀以後詩序」私注』（静岡大学教育学部研究

報告）二五、二六

Ki-no Haseo: Integrity in a Man of Letters

Tatsuo Inoue

Abstract

Ki-no Haseo (紀長谷雄) was the literary man or government official in the period of the Emperor Uda (宇多天皇) or the Emperor Daigo (醍醐天皇)

Sugawara Mitizane (菅原道真) recommended Ki-no Haseo (紀長谷雄) as excellent poet.

But Ki-no Haseo (紀長谷雄) was the faithful government official.